

実践報告

ホロニカル・アプローチによる スーパービジョン

ホロニカル・スタディ法による 共創型事例研究の実践 -

千 賀 則 史
定 森 恭 司

要約

本稿では、内的世界と外的世界を共に扱う統合的アプローチであるホロニカル・アプローチによるスーパービジョンの実践報告を行った。今回は、ホロニカル・アプローチに基づくグループスーパービジョンの一つの方法として、ホロニカル・スタディ法を取りあげ、ある支援機関への共創型事例研究の実践プロセスを紹介した。本稿において、スーパーバイザーが多様な心理社会的支援を混乱なく統一的に理解していくためには、異なる理論や技法を統合するパラダイムが必要であり、統合的立場のホロニカル・アプローチによるスーパービジョンの意義が大きいと結論づけた。また、「部分と全体の縁起的包摂関係」というホロニカル・アプローチの基本概念に基づくホロニカル・スタディ法では、部分と全体が自己相似的になっているフラクタル構造に注目し、既存の各学派や各理論の違いを超えて、具体的な場面での瞬間的な対応を扱うところに最大の特徴があると考察した。

キーワード：統合的アプローチ、ホロニカル・アプローチ、スーパービジョン、
ホロニカル・スタディ法

Keyword: integrated approach, holonical approach, supervision, holonical study method

1. はじめに

筆者らは、これまでの福祉心理臨床領域、学校心理臨床領域などの現場経験を生かして、公的機関、民間団体などでさまざまな支援に従事する個人やグループを対象としたスーパービジョン（以下、SV と略記）を行っている。SV で扱われるのは、いじめ・ハラスメント、不登校・引きこもり、虐待、DV、家庭内暴力、反抗挑戦的行動、愛着障害、発達障害、自殺念慮・自殺企図、反社会的問題行動、依存・嗜癖など、対応に困難を感じるケースばかりである。しかし、こうした困難事例であっても、内的世界と外的世界を共に扱う統合的アプローチであるホロニカル・アプローチの立場から SV を行うことで、明らかに効果的な変容が生じ、スーパーバイザーの成長を促進する手応えを得ることができている。そこで本稿では、筆者らが行っているホロニカル・アプローチによる SV の実践報告を行い、統合的アプローチの視点からの SV の意義について考察する。

2. 用語の定義

(1) スーパービジョンとは

対人援助職（スーパーバイザー）が指導者（スーパーバイザー）から教育を受ける過程、対人援助職における人材育成のことである。スーパーバイザーがスーパーバイザーと定期的に面接を行い、継続的な訓練を通じて専門的スキルを向上させることを目的としている。元来、SV は、心理療法の技術向上を目指す教育方法であったが、現在は、ソーシャルワークや保育、教育など、さまざまな分野で専門職養成の一般的な教育方法として広く用いられている。

SV の形態としては、個人 SV、グループ SV、ピア SV などがある。個

人と契約する場合、必然的に個人 SV を行うことになるが、筆者らが公的機関、民間団体などの組織と外部スーパーバイザー契約をする場合、個人 SV とグループ SV を組み合わせて実施することが多い。グループ SV では、グループの中で一人のスーパーバイザーの事例を検討するが、その検討をスーパーバイザー間で行うことによって、スーパーバイザー全員の成長を図ることができる。Proctor (2008) によると、グループ SV は、参加者の 4 つの C (Competence、Confidence、Compassion、Creativity - コンピテンス、自信、思いやり、創造性) の発揚の場になるものであり、スーパーバイザーは、 集団の管理・運営者、 グループの目標・課題を遂行するトレーナー、 メンバーの相互作用を促進するファシリテーター、 個人のニーズ・要求の擁護者としての役割を負うことになる。複数の参加者による複雑でダイナミックな交流がグループ SV の醍醐味であり、効果的に活用すれば、組織全体の支援能力向上を図る上で有効な方法だと思われる。そこで本稿においては、ホロニカル・アプローチによる SV のエッセンスを伝えるために、特にグループ SV に焦点を当てて検討を行う。

(2) ホロニカル・アプローチとは

ホロニカル・アプローチとは、開業臨床心理士の定森恭司により提唱された日本独自の理論であり、“こころ”の深層から、身体、関係性や社会に至るまで、人間のありようを部分から全体、あるいは全体から部分に向かって自由自在に俯瞰することを重視する統合的アプローチである。「心的苦悩を契機に、“こころ”の内的世界および外的世界を自由無礙に俯瞰することによって、より生きやすい生き方の発見・創造を促進する支援方法」(定森・定森、2019)と定義される。ホロニカル・アプローチの原点となる着想は、定森が児童相談所に勤務していた 1980 年代まで遡り、1994 年に児童相談所関係者の研究誌で「ホロニカル」の概念が初めて公開された(定森、1994)。2002 年には、「ホロニカル・セラピー」が初め

て学会発表され（定森、2002）、その後、関連する書籍が発刊されている（定森、2005；定森、2015）。さらに、2019年になり、心理療法を包摂する形で心理社会的な統合的観点から「ホロニカル・アプローチ」が提唱された（定森・定森、2019）。

今回は紙面の限界もあり、理論や技法の詳細を説明することはできないが、詳しくは、定森（2015）の『ホロニカル・セラピー 内的世界と外的世界を共に扱う統合的アプローチ』（遠見書房）や、定森・定森（2019）の『ホロニカル・アプローチ 統合的アプローチによる心理・社会的支援』（遠見書房）などを参照されたい。

3. ホロニカル・アプローチの主な観点

(1) 縁起的包摂関係

ホロニカル・アプローチの中核にあるのは、「ホロニカル」という概念であり、「部分と全体の縁起的包摂関係」を意味する。ホロニカル・アプローチでは、縁起的包摂関係（ホロニカル関係）という観点から、心的問題について、「ある心的問題を部分とすると、そこには被支援者の内的・外的世界をめぐるすべての問題が織り込まれている」と考える。ある心的問題を、全体の要素還元的な単なる部分の問題として扱うのではなく、ある部分の変容は、全体の変容に関係し、全体の変容は、ある部分の変容に深く関係すると捉える。

SVで取り上げられるのは、内的世界から外的世界に至るさまざまな要因が複雑に絡み合った困難事例がほとんどである。さらには、大抵の場合、支援に携わる専門職の体制や多機関・多職種連携にもさまざまな課題を抱えている。しかし、ホロニカル・アプローチの立場からいえば、こうした問題のすべてを解決しなければならないわけではない。すべての現象は縁起的に絡み合っているものであり、小さな意味のある変化さえ生み出すこ

とができれば、ある部分の変化は、全体へと影響し、新しい展開が生まれると考えられる。そのため、ホロニカル・アプローチによるSVでは、被支援者 - 支援者のさまざまな感情が渦巻くある局面のある瞬間を丁寧に扱うことを重視する。その瞬間に、事例に対する支援のあり方のすべてが織り込まれており、その瞬間の対応が変化すれば、これまでみられなかった新たな展開が生まれると考えているからである。

(2) 不一致・一致の "ゆらぎ" の重視

ホロニカル・アプローチでは、自己と世界の関係は、不一致となった瞬間、主客が多層多次元にわたって対立し自己に生きづらさをもたらし、一致となった瞬間、主客合一の関係となり、生きやすさの感覚をもたらすと考える。ホロニカル・アプローチでは、自己と世界的不一致・一致の "ゆらぎ" を重視し、一致ばかりを求めるのではなく、むしろ不一致の状態に積極的な意味を見出す。自己と世界が不一致となり対立するからこそ、新たな自己と世界の関係が創造されてくる契機と捉え、スーパーバイザーが抱いている違和感や不全感といった不一致を丁寧に扱っていく。

(3) 自由無礙の俯瞰

ホロニカル・アプローチによるSVでは、自己と世界的不一致・一致を行ったり・来たりすることを、スーパーバイザーが安全かつ安心して自由無礙に俯瞰できる場の構築を試みる。一般的に、「俯瞰」というと、鳥瞰的視点を意味する場合が多いが、ホロニカル・アプローチでいうところの「俯瞰」とは、ある出来事を観察対象とし、無限のマクロの球の立場から観察するとともに、無限のミクロの点の立場から観察し続けることである。

通常、人は観察主体が観察対象のいずれかしか意識化しない。そのため、観察主体と観察対象の関係が、何らかの悪循環パターンに陥っていても、なかなか自力では負のスパイラルから抜け出せなくなる。こうした場合は、

観察主体と観察対象の不一致・一致の関係を新たな適切な観察ポイントから自由に柔軟に観察する場をもつことが重要であり、そのような場としてのSVの意義は非常に大きい。ホロニカル・アプローチによるSVによって、自己と世界の不一致・一致を自由無礙の立場からスーパーバイザーとスーパーバイザーが共に俯瞰する場をもつことによって、観察主体と観察対象の組み合わせによって生じる多層多次元わたる現象世界が、あらゆる部分と全体の関係が縁起的包摂関係（ホロニカル関係）にあることの実感・自覚を促進することができるからである。こうした俯瞰の確立が、従来の支援方法による悪循環パターンを脱却し、自分自身の支援者としてのあり方を見直すことを促進し、よりよい支援を創造することを可能とする。

(4) 場所と自己の関係への注目

ホロニカル・アプローチでは、場所と自己の関係に注目する。支援の実施場所が異なれば、どのような支援対象、支援体制、面接構造、支援方法がよいのかも変わってくる。ホロニカル・アプローチでは、自己とは、生物・神経学的な特性、自然、風土、社会、文化、歴史などと相互影響・相互限定し合う場所的な存在であると考え。「場所的自己」（定森、2020）ともいえる自己は、自己が生きている場所で、苦悩を新しい生き方の創造・発見の契機として、新しい自己を自己組織化しながら生きていると捉えることができる。

従来の心理学における「自己」の概念には、「自己の底」に「生きている場所」がなかったといえる。「場所」の視点のない「自己」の概念では、ある場所の混乱を一切切歴史的に背負って苦悩する当事者の生々しさを的確に表現し切れず、あたかも個人病理のように扱ってしまうことで、適切なケース理解を妨げることにもつながっていたと考えられる。

対人援助の現場では、既存の理論や技法を、それらが培われてきた場所の歴史的な差異を考慮せずに、そのまま活用しようとしてもうまくいかな

ホロニカル・アプローチによるスーパービジョン

いことが多い。培われた場所が異なっていれば、場所違いの理論や技法を使用することになるため、まさに「場違い」な支援になってしまう。ホロニカル・アプローチでは、場所論を採用することで、現場の状況に応じて、既存の心理社会的支援の理論や技法を統合的に活用することを促すSVが可能となる。

(5) 共同研究的協働関係の構築

ホロニカル・アプローチでは、「人間の苦悩について、共に抱え、共に向き合っ、より生きやすくなる道を共に発見していく行為」を心理社会的支援と捉え直す。そのため、「被支援 - 支援の関係」が「共同研究的協働関係」に変容していくような枠組みを重視している。こうした枠組みによって、不平等を孕みがちだった対話から「共創的対話」への転換を図る。

ホロニカル・アプローチにおける「被支援 - 支援の関係」は、そのままSVにおけるスーパーバイザーとスーパーバイジーの関係に当てはめることができる。つまり、一方的に指導を受けるという関係ではなく、よりよい支援方法を模索し、ひいては多くの人にとってより生きやすい社会を実現することに向けた共同研究的協働関係の構築を図る。このような姿勢は、「指導する側」と「指導される側」という上下関係を前提とした権威主義的なSVとは全く異なる。こうした関係性の違いによって、創造的な対話が生まれると考えられる。

4. ホロニカル・アプローチによるグループスーパービジョン

(1) ホロニカル・スタディ法

ホロニカル・アプローチに基づくグループSVの一つの方法として、ホロニカル・スタディ法(定森, 2005)がある。この方法は、インシデント・プロセス法をベースにしなが、定森露子・定森恭司が独自に創り出した

ものである。インシデント・プロセス法とは、問題と背景が事前に提示されず、質問することで必要な情報を得て自分の対応策を作成するものであるが、ホロニカル・スタディ法では、これをアレンジし、具体的な場面(瞬間)を取りあげることと、実際の場面を再現して導入していることが最大の特徴である。これはホロニカル・アプローチの基本概念である「部分と全体の縁起的包摂関係」、つまり部分に全体が織り込まれているという考えに基づいている。ホロニカル・スタディ法では、スーパーバイザーとスーパーバイザーが「共創的關係」となるような「場づくりのファシリテーター的姿勢」を重視する。そのため、上下関係がある中で、スーパーバイザーが事例の見立てや支援方法について助言する従来の権威的SVとは異なり、ホロニカル・スタディ法は、参加者中心の共創型の事例研究となり、参加者全員が類似事例に対する日頃の対応の見直しを促進するというように、SVのあり方のベクトルが逆向きになる。本稿では、ある支援機関に対して、ホロニカル・スタディ法を用いたグループSVを実践したプロセスについて架空の事例を通じて紹介する。

(2) グループによるホロニカル・スタディ法のプロセス

<オリエンテーション>

グループSVの司会進行の担当者とは、事前に打ち合わせを行い、ホロニカル・スタディ法による事例研究の進め方について共有した。この際に、ホロニカル・スタディ法においては、スーパーバイザーは「指導者」ではなく事例研究の「ファシリテーター」の役割を担うこと、事前資料作成の必要はないこと、事例発表者には、「あのとき他の支援者ならば、どのように振る舞うのかを考えてもらう事例研究」と伝えもらうことなど伝えた。当日は、「ある思考、ある姿勢、ある気分、ある出来事、ある言動、ある仕草などの一部分にすべてが含まれており、ある一部分の小さな意味のある変化は、他の部分の変化へと影響していく」というホロニカル・アプロー

子の基本的な観点について紹介した。さらに、グループによる事例研究の趣旨について簡単なオリエンテーションを行い、対応策に唯一の正解があるわけではないこと、ロールプレイの実践と他者の対応策の観察を通して、それぞれの人が感じたこと気づいたことを大切にしてほしいこと、タイムスケジュールなどを伝えた。

<場面の絞り込み>

事例発表者に簡単なケース概要を説明してもらったら、「いろいろある問題の中で、もっとも今でもモヤモヤしていて腑に落ちず、あのとき他の人ならどのように振る舞うのだろうか、今日ここで取り上げたいような、ある瞬間の具体的な場面に絞るとしたら、どのようなときになるでしょうか」と問いかけた。事例発表者とやりとりをしながら、映画のように映像化できるレベルまで、場面の絞り込みを徹底的に行った結果、「不登校の中学生に家庭訪問をしたときに、子ども部屋に母親と一緒に入ったら、子どもはベットの上で布団を被ったまま寝ていました。それで、母親が『起きなさい!!』と声を荒げて布団をめくろうとしたんですが、子どもは抵抗して布団の中に潜り込んでしまいました。このとき、私は、何も言えずに黙ってしまったけど・・・お母さんがいきなり、起こそうとしたとき、もっと別の対応の仕方はなかったものかと、今でも何かモヤモヤしていて・・・」と語られた。

<情報収集>

場面の絞り込みが終わったら、参加者に「後で、自分だったら、母親が起きなさいと声を荒げ、子どもが布団の中に潜り込んだとき、どうするかという視点からの対応策を紙に書いてもらうので、その対応策を提出するために必要となる情報を事例発表者にいろいろと質問してください」と指示した。事例発表者には、聞かれたことに対して憶測は極力避け、できる

だけ事実レベルで知っていることだけに答えればよいこと、答えに窮するような質問には答えなくてもよいということを伝えた。この際には、質問と応答が促進されるにつれ、対象となっているケースのイメージ、発表者の困っている内容（感情レベル・認知レベル・行動レベル）、家の間取り、部屋の様子、時間帯などの現実が、まるで映画のように再現され、参加者全員が出来事の起きた場面を共有されるようなファシリテーションに心がけた。

< 対応策の記載 >

ある場面の出来事が共有できたら、「それでは、自分だったら、そのときどうするのかの意見を、5分以内に配布された紙に書いてください。実践では、いつも瞬間・瞬間の勝負ですから、あまり考えこまず思いついたことをさらっと書いてください」「抽象的な表現は避けて、具体的なセリフ、仕草などを行動レベルで記載してください」「最後に、今日の日付と氏名を記載してください」と参加者全員に紙を配布しながら対応策の記入を求めた。

< 発表とロールプレイ >

対応策の記入が終わったら、まずは紙に記載してあることをそれぞれに読み上げてもらった。紙に書かれていないことを話し始めた人に対しては、「すみませんが、まずは書いた通りに読み上げてください」と促した。また、< 気持ちに寄り添いながら対応する > といった抽象的・一般化された意見が出てきた際には、「もしこの場で、子どもの気持ちに寄り添って接するときは、例えば、〇〇さんだったら、実際にはどのようにされますか？」と行動レベルで明確化・具体化していった。

こうした読み上げが終わったら、「それでは実際に、その場面を事例発表者の方に子ども役となってもらい、やってみましょう」と事例発表者と

対応策発表者の2人により場面を再現してもらった。「事例発表者の方は、今の出された対応策に対して、もしその子だったらどのように反応するのか、今までの体験や経験から想像して対応してみてください」「対応策の発表者の方は、読み上げた内容に従って、実際にやってみましょう。そして、子ども役の人の反応を見て、次の対応を即興的に演じてください」と指示した。

ロールプレイは、5分以内で行ってもらい、やりとりの方向性が決まったあたりで「ありがとうございました」と区切りをつけ、対応策発表者の労をねぎらった。今回は、少人数であったため、全員による発表と場面再現を実施した。その後、参加者に1人1分でロールプレイの具体的な感想や意見を求めた。また、事例発表者自身に事例を発表してみたの感想を求めた。参加者からは、一つの場面に対して多様な対応策があり、それぞれの違いが興味深かったこと、誰が対応したとしても一筋縄ではいかず、自分たちが行っている支援の難しさを共有し、お互いにねぎらうことができたこと、子ども役を体験してみて、会話などの具体的な反応がない場合でも、支援者からの働きかけに対して、さまざまなことを考え、感じていることを実感できたことなどが語られた。最後に、簡単なコメントをし、発表者および参加者の協力に謝辞を述べ、ホロニカル・スタディ法による事例研究を終了した。

5. 考察

(1) 統合的立場からのスーパービジョンの意義

日本におけるSVの問題として、心理療法理論の多様なモデル間の相互交流が少ないことなどがあげられる(平木, 2017)。特定の心理療法の学派などを標榜している指導者は、他の理論モデルに関心が低いばかりでなく、対立・排除の姿勢をもつことがあり、特定の理論・技法を専門として

いないスーパーバイザーは、その指導者のSVを受けることに躊躇し、逆に、その指導者の理論にコミットすると、多様な理論モデルに触れる機会を失うことになる。

心理職のスーパーバイザーであれば、精神分析、認知行動療法、来談者中心療法、家族療法、集団心理療法、コミュニティ・アプローチなど、多様な心理療法について、ある程度の議論ができるほどに通じている必要がある。さらには、場所と自己の関係に注目するホロニカル・アプローチの立場では、場所が変われば、支援のあり方も変わってくると考える。加速度的に変化する時代の中で、過去に有効だった方法が現在もそのまま通用するとは限らないため、常に新しい心理社会的支援のあり方を模索していく必要がある。そのため、スーパーバイザーは、最新の研究と世界の動向に明るく、よりよい心理社会的支援の構築に向けて、スーパーバイザーと相互交流しながら共に歩む共同研究的協働関係を重視した開かれた態度であることが望ましい。

このように考えると、スーパーバイザーには統合的立場からSVを行うことが求められているといえるだろう。ただし、これは、スーパーバイザーは、すべての心理療法の学派に精通していなければならないという意味ではない。「"こころ" とは何か」「対人援助とは何か」という本質を追求しながら、多様な心理社会的支援の方法について、開かれた姿勢であることこそが重要だと思われる。スーパーバイザーが現場実践に即して多様な心理社会的支援のあり方を混乱なく統一的に理解していくためには、異なる理論や技法を統合する原論となるパラダイムが必要であり、「こころ」とは何かという根源的な問いを深めていく中で生まれたホロニカル・アプローチによるSVの意義は非常に大きいといえる。

(2) ホロニカル・アプローチによるスーパービジョンの特徴

ホロニカル・アプローチでは、被支援者 - 支援者関係、被支援者の対人

関係などの各次元において同じようなパターンを繰り返しているフラクタル構造に着目する。フラクタル構造とは、部分と全体が自己相似的になっていること、つまり、マイクロレベルでの構造パターンがマクロレベルでも繰り返し出てくる構造のことである。スーパーバイザーが支援に行き詰まってしまふパターンも、部分と全体が悪循環パターンを包摂しているというある種のフラクタル構造をなしており、自己および世界との関わりのさまざまな次元で、自己相似的な固着パターンを繰り返していることが多い。ホロニカル・アプローチによるSVでは、こうしたフラクタル構造となっている悪循環パターンの発見をサポートし、悪循環パターンの変容促進の方法を共創的に発見していく作業を丁寧に行っていく。SVを通して、スーパーバイザーに小さな意味のある変化が生まれれば、やがてそれは大きな変容へとつながっていく可能性がある。このようにホロニカル・アプローチによるSVでは、ある部分と全体とのホロニカルな関係を見通した上で、悪循環パターンを取り扱っていく。

こうしたホロニカル・アプローチの考え方を具現化した方法として、ホロニカル・スタディ法がある。この方法の最大の特徴は、既存の各学派や各理論の違いを超えて、具体的な場面での瞬間的な対応を扱うところにある。部分と全体のホロニカルな関係を突き詰めて考えていけば、ある一瞬の出来事の中には、時間的空間的なもののすべて、過去から現在に至るもののすべて、未来を開いていくもののすべてが含まれていると捉えることができる。ホロニカル・アプローチでは、今この瞬間・瞬間による非連続的連続の繰り返しの中で、すべてが不一致・一致を繰り返しており、すべてが不一致となって自律的に振る舞いつつも、他方では、すべてが一致する関係を求めて自己組織化しようとしていると考える。

ホロニカル・スタディ法では、こうした考え方に基づき、ある瞬間を取りあげて、実際の場面を再現してみる。ここで重要なのは、不一致を楽しむことである。対応の統一を求めるよりも、むしろ不一致を楽しむ、同じ

場面に対してだけでも、これだけ多様な関わり方があるのかと実感・自覚するだけでも、参加者のその後のよき実践の探求の契機となることができる。また、グループによる事例研究では、ある困難な局面に対してさまざまな参加者が異なるアプローチを行ったとしても、同じように悪循環パターンに陥ってしまうほどの重篤な事例に遭遇することが稀にある。しかし、こうしたときは、アプローチが不一致にもかかわらず参加者全員が共通して陥るフラクタル構造が明らかになるだけでも意味がある。「とにかく今の対応法だけでは悪循環を超えられない」との共通認識が生まれるだけでも、悪循環パターンに陥っている現行の対応法を断念し、新しい対応法を探求しようとする支援者の意識の変容そのものが事例の変容を促進する契機となるからである。ホロニカル・スタディ法では、対応策について、唯一の正解を想定して、一致を求めるのではなく、参加者同士の対応策の違いを観察し、そうした不一致から、新しいアプローチを創造していく姿勢が大切となっているのである。こうしたプロセスを通して、「不一致の一致」ともいえる感覚を経験できるようにファシリテーションを行う。具体的には、誰が対応したとしても困難なケースであるという意味では一致していること、たとえ異なるアプローチであってもこうしたSVや事例研究の場の雰囲気ならば、いずれもっとよいアプローチが発見・創造できそうだという実感・自覚を促していく。このようにホロニカル・アプローチによるSVは、一瞬の出来事に、複雑な絡み合いのすべてが包摂されており、すべてが相矛盾しながらも同一にあらうとしているというホロニカルな世界観に基づいていることが大きな特徴だといえる。

こうした特徴をもつホロニカル・スタディ法は、従来の事例検討とは異なり、事前に膨大な資料の作成に追われることがなく、当日も大勢の人の前で批判にさらされることもない。過酷な現場で疲弊しながら一生懸命に働いている支援者にとって事前準備の負担が少ないという点は重要であり、ストレスの多い仕事だからこそ、あたたかい雰囲気の中で、仲間たちと安

心・安全に対話ができる「場」が必要不可欠である。ホロニカル・スタディ法は、こうした現場のニーズに応えることができる方法であり、非常に実践的なSVの方法であるといえるだろう。その一方で、具体的な場面での瞬間的な対応を重視して検討する方法ゆえに、発表された事例に直接関与していない支援者や現場での実践経験のない立場の者（学生や研究者）は事例を扱いづらいこと、ある局面で、どのように振る舞うのかを検討するための方法であり、診断やアセスメントを目的とする事例検討には馴染まないことなどが限界としてあげられる。また、ロールプレイに抵抗のある人への配慮も必要だと思われる。

(3) 継続的なスーパービジョンの必要性

今回は、ホロニカル・アプローチによるSVを分かりやすく説明するために、ある1回のホロニカル・スタディ法を活用した事例研究によるグループSVの実践に焦点を当てたが、SVとは、継続的に行ってこそ効果が得られるものである。また、今回は、あえてグループSVにおける一般的な事例検討以外の方法として、ホロニカル・スタディ法を紹介したが、当然のことながら、SVは、個人SVが基本となる。また個人SVによるホロニカル・アプローチの研鑽法の一つとしては、事例研究を中心とした個人SVとともに、教育的自己分析がある。教育的自己分析は、対人援助職として生きるために、スーパーバイザーがより深い自己自身の自己理解を得ることを目的とするものであり、SVとは似て非なるものである。両者の違いは、SVでは、原則、スーパーバイザーの個人的な心理傾向や個人の課題を直接的に扱わないのに対して、教育的自己分析では、対人援助職の抱えている葛藤や心理的課題を中心に扱うところにある。ホロニカル・アプローチでは、SVと教育的自己分析のどちらも行っており、教育的自己分析の場合、夢分析（内的世界・非日常的世界・無意識を含む世界）と日記（外的世界、日常世界・意識の世界）を用いた統合的アプローチを行う

ことが一般的である。ある夢には、内的世界と外的世界の関係をめぐるさまざまな課題が象徴的に顕れてくるため、小物を使った外在化などを用いて、夢の中での内的対象関係や現実の外的対象関係のあり方を見つめ直す場を提供することで、スーパーバイザー自身の適切な自己の自己組織化の促進を図る。こうしたプロセスこそがホロニカル・アプローチのエッセンスそのものであるため、ホロニカル・アプローチを学ぶ上では、教育的自己分析を受けることが非常に有効であるともいえる。今後は、ホロニカル・アプローチによる個人SVや教育的自己分析のあり方についても実践を通じてさらに研究をしていく必要があるだろう。

付記

本研究は JSPS 科研費（課題番号 JP21K13484）「子ども虐待事例に対する内的世界と外的世界を共に扱う統合的アプローチのモデル構築」（研究代表者：千賀則史）の一環として行われた。

文献

- 平木典子（2017）『増補改訂 心理臨床スーパーヴィジョン 学派を超えた統合モデル』金剛出版
- Proctor, B. (2008) Group Supervision: A Guide to Creative Practice (2nd ed.). London: Sage.
- 定森恭司（1994）「地域心理臨床試論」『地域臨床研究会』、86-92.
- 定森恭司（2002）「ホロニカル・セラピーについて：心の内外の俯瞰的観察を促進する新しい臨床心理学的アプローチ」『日本心理臨床学会第21回大会』
- 定森恭司（2005）『教師とカウンセラーのための学校心理臨床講座』昭和堂
- 定森恭司（2015）『ホロニカル・セラピー 内的世界と外的世界を共に扱う統合的アプローチ』遠見書房
- 定森恭司・定森露子（2019）『ホロニカル・アプローチ 統合的アプローチによる心理・社会的支援』遠見書房
- 定森恭司（2020）「『場所的自己』について」『統合的アプローチ研究』(1)、6-23.
- 定森露子（2005）「学校心理臨床の研修のあり方」（定森恭司編）『教師とカウンセ

ホロニカル・アプローチによるスーパービジョン

ラーのための学校心理臨床講座』昭和堂、pp154-167.

「『同朋福祉』に関する内規」により「実践報告」として査読済み
千賀則史（本学准教授：公認心理師の職責）
定森恭司（心理相談室“こころ”）